

稱讃 二〇四号

一〇一九年二月一日発行

おほよそ大信海を案ずれば、
貴賤縊素を簡ばず、
男女老少をいはず。
「教行信証」信巻、
「註釈版聖典」二四五頁

去る十二月五日（木）、築地本願寺におきまして、社会福祉推進協議会東京教区支部の主催によるビハラ活動研修会が開催されました。

ご講師は、大阪教区中島東組瑞松寺ご住職の野村康治師でありました。野村先生は、自坊で、社会福祉法人「至心会」を平成八年に立ち上げ、淡路介護老人福祉施設「ビハラ」と新東淀地域在宅サービスステーション「ビハラこのみ園」を開設されておられます。

お話は、サンスクリット語の「ダルマ」は「真理」という意味で、「真理」は「変わる」ことがない」ということである。そして「ダルマ」は「法」と漢訳され、「法」は「灑」の略であり、「水平」を意味すること。底が凸凹であっても、全てを含めて平らかにすることから「平等」の意味があり、「ダルマ」の漢訳に使われた。しかし、人

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃 寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

H P shousanji.com

人間社会における「法律」「制度」は何度も変わる。救急救命法では、一〇歳の子を先に助けるか、九〇歳の方を先に助けるかとなった場合、九〇歳から助ける



11月25日 秋の鑲阿寺

ことになっている。児童福祉法で、児童は毎日お風呂に入れるが、介護では、週二回以上となっている。全く「平等」ではない。命はいつからいつまでか―法律上、オギャーと生まれてから死ぬまで。生後十二週間経たないと茶毘にふされない。未滿だとゴミ処理扱いのこと。病院で不足している専門職は何か―女性の手話通訳者とのこと。日本の緩和ケア病棟だけ宗教者の常駐の義務がない。海外では、愛しい方を亡くした人に、三ヶ月、ケアマネジャーが寄り添うが、日本は要介護者が亡くなったら関係がなくなる。亡くなった方を病院の裏から出すようになってから、亡くなった方を褒めなくなった等々。制度的なこと、規定的なこと、法律について私たちは曖昧であり、仏法を聴いても、なおさら曖昧にしないか。社会福祉士の倫理綱領でも「われわれ社会福祉士は、すべての人が人間としての尊厳を有し、価値ある存在であり、平等であることを深く認識する。」と謳ってはいる。先生のお話を聴いて、不変で平等な観点から制度を見つめ、現場で実践しておられるのだと思いました。一人一人のいのちの尊厳を脅かしていることには、怒りをあらわにしておられるようでした。至心会は五つ星 評価）私は、制度だから仕方ないとか、行政に任せておけば良いとか、そう思っていました。

あるお婆さんが、野村先生に話したそうです。私は浄土真宗で良かったと。俺に打たれるような修行の苦しみより子を亡くす苦しみの方が大きい。思い通りにならない人生を超えていく教えに出遇えて良かったと。

築地本願寺 報恩講 厳修

十月十日(月)～十六日(土)



去る十一月十一日(月)から十六日(土)まで、築地本願寺におきまして、宗祖親鸞聖人の報恩講が厳修されました。
十三日(水)の連夜法要には、御門主様 専如様(が)ご親修でした。
十五日(金)大速夜法要並びに十六日(土)御満座法要には前門様 即如様(が)ご親修でした。
そして、十五日には、ご門徒の山田昌三さんが、帰敬式をお受けになられ、前門様におかみそりを当てていただかれました。
十一時半頃、築地本願寺の本堂正面(向拝)で住職と待ち合わせ、お齋弁当を食べて、十三時頃、帰敬式の受付を済ませました。
二時からの大速夜法要に山田さんはご参拝され、住職は出勤しました。大速夜法要では、前門様のご法話がございました。
その後、帰敬式が行われました。



ました。この日は、百名近い方々がお受けになりました。
山田さんのご法名は「釋建法」 ちやくこんぼう(を)頂かれました。
このご法名の出拠は『弘説無量寿経』の「六相化儀」の一節より頂いております。書き下し文は次の通りです。
成道せられし菩薩は「仏の遊歩をもつてし仏の吼をもつて吼す。法鼓を叩き、法螺を吹き、法剣を執り、法幢を建て、法雷を震ひ、法電を曜かし、法雨をそそぎ、法施を演ぶ。つねに法音をもつて、もろもろの世間を覚せしむ。光明、あまねく無量の仏土を照らし、一切世界、六種に震動す。
六相化儀」とは、釈尊の生涯における八つの重要な場面が説示されたものです。この箇所では、さとりを得られた釈尊が、勇猛に説法されているすがたが描写されています。法幢」とは、いわば「真理の旗」のことであり、釈尊が真理の旗を掲げて説法され、世間の人々をさとりに導いたことがあらわされています。
真理の旗 南無阿弥陀仏」を共に称えて参りましょう。
山田昌三様、おめでとうございます。

親鸞聖人のこと事跡

- 一二七三年 五月二十一日 親鸞聖人ご誕生 暦承安三年四月一日
- 一二八二年 慈円僧正(慈鎮和尚)の坊舎で得度、範宴と号す。比叡山に入山(九歳)
- 一二八二年 恵信尼公ご誕生 後、聖人のご内室
- 二〇二年 比叡山を下り、六角堂にご参籠(源空 法然) 聖人の門に入る(二九歳)
- 二〇五年 撰撰本願念仏集」を书写(三三歳)
- 二〇七年 専修念仏停止により、越後国府にご流罪(三五歳)
- 二二二年 流罪赦免(三九歳)
- 二二四年 越後から関東へ向かう。以後、常陸(茨城県)を中心に伝道につとめる(四二歳)
- 二二四年 常陸稲田の草庵で 教行信証」をご執筆(五二歳) 息女覚信尼公ご誕生
- 二二三年 この頃、関東から京都へ帰洛か(六〇歳)
- 二四八年 浄土和讃」 高僧和讃」をご執筆(七六歳)
- 二五〇年 唯信鈔文意」をご執筆(七八歳)
- 二五五年 尊号真像銘文」 愚禿鈔」などをご執筆(八三歳)
- 二五八年 正像末和讃」をご執筆(八六歳)
- 二六三年 一月六日 善法坊でご往生 暦弘長二年(二月二八日) 九〇歳

(二〇一九年度築地本願寺報恩講菜より)

設我得仏

たとひわれ仏を得たらんに

稱讃』一九七号（二〇一九年五月号）

にて 天上天下唯我為尊 三界皆苦吾当安之」についてお話ししました。

そこでは、まず 我」と 吾」の意味を調べて見ますと、 我」は「のこぎり

と 戈」を両手に持った自分の姿を表わし、他とは隔絶した自分だそうです。つまり、 我執」 我が儘」と言った煩惱を持った自分のことを指します。 吾」は「りっしんべん」を付けると 悟」であります。 我」は悟る前の自分であり、 吾」は悟った、仏となった自分を言うのであります。

「と。そして「尊」は「と」とい、と呼んで、形容詞と思ってしまうますが、仏さまを数える単位でもあります。 「二仏」を「二尊」、 釈迦三尊」と言ったりします。つまり、 尊」とは

仏」と解しても良いと思いますので、 天上天下唯我独尊」の場合は、この世界で唯独り人間の私は仏となり、この世界（で苦しむ人々を全て救っていく」という宣言でありましょう。それはお釈迦さまだけのことでなく、 為」の場合は 天上天下」とは「二切衆生」のことであり、全ての生きとし生けるものは、唯 自然に」仏となる尊い存在なのであり、この迷いの世界で苦しむものを救うものであると

言うことではないでしょうか。」とお話ししました。

ところが、 我」が煩惱を具足し、自分に囚われた姿を表現しているのなら、 四十八願」の全て冒頭には 設我得仏」と出てくる 我」をどう理解したらよいのだろうと疑問に思いました。

第十八願では、 設我得仏 十方衆生至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者不取正覺 唯除五逆 誹謗正法」と 我」が二回出てきます。しかし、第十八願成就文では、 諸有衆生 聞其名号 信心歡喜乃至一念 至心回向 願生彼国 即得往生住不退転 唯除五逆 誹謗正法」とあり、 我」は一度も出てきません。

阿弥陀さまは、阿弥陀如来という仏さまに成られる前、法蔵菩薩として、五劫の間、思惟されて、四十八願をお建てになりました。それから 重誓偈」でも 我建超誓願 必至無上道」と誓われ、兆載永劫の修行を為されて、十劫の昔、阿弥陀さまに成られたと説かれています。そう言う意味から、本願をお建てになられる時は、仏さまとしての 吾」ではなく、まだ悟りに至っていないから 我」とご自身を名告られたのだと思います。

しかし、あるご法話で、 この私の全てを背負って、修行なされたのです。」と聴いたことから、 設我得仏」と、 我」と名告らずにはおれなかったのは、阿弥陀さ

ま 法蔵菩薩さま」のお心は、 曠劫よりこのかた、つねにしづみ、つねに流転して、出離の縁あることなき」（歎異抄」、 註釈版聖典』八五三頁）この私という”いのち”そのものを決して手放さないお心 私（の身となつて）を表わしているのではないかと思えました。

私のいのちそのものを抱きかかえ、背負われ、永劫の修行を重ねられて、ご本願を成就なされたのです。

親鸞聖人は、 弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめたちける本願のかたじけなさよ」（歎異抄」、 註釈版聖典』八五三頁）とご述懐されたことでもあります。

妙好人の源左さんが、亡くなる父親からこれからは親 阿弥陀さん」をたのめとの遺言から、いろいろ法話を聞いたけれど、わからなかった。ある日、牛と草刈りに行った帰り、急にお腹が痛くなつて、自分が背負っていた草を牛に背負わせたら、腹痛が治った。その時、阿弥陀さまをたのめとは、私のいのちそのものを阿弥陀さまが背負ってくださっていることと気づかれたのでした。

そのことを言い習ってきたのでしようが、日常の生活に流されて、埋没させてしまっている私であります。

「たまたま」とは

去る十二月二日、先の台風十九号への対応について臨時の「定立区避難所運営会議 本部長・庶務部長会議」が開催され、出席しました。

この台風の概要を総合防災行政アドバイザーの松尾一郎氏がお話されました。

その中で、**たまたま**、荒川の岩淵水門の最高水位と東京湾からの最高波位に時間の差があったから、今回、荒川が氾濫せずに済んだのです。」という報告にびっくりしました。

当日の私自身の心境を振り返りますと、十二日午後三時に避難所を開放しますとの連絡を受け、避難所運営の役員さんへの最初の連絡をしたときは、とりあえず三時前に行けばいいのだぐらいにしか思っただけで、川近くの方が数人避難して来られるぐらいにしか考えておりませんでした。連絡が済んだ後、ある役員さんが、泊まりがけを予定しておくべきではないかとの問い合わせがあり、慌てて、泊まりがけになることを連絡し直したことでありました。自分も、少しおにぎりを持ち、傘ではなく、雨合羽を着て行きました。

私たちの避難所（東栗原小学校）では、十二日午後三時に体育館を開放して、約二百名の方々が避難して来られました。

避難者全員に食事もあり、落ち着いたところで、午前九時に体育館の明りを落としました。そしたら、午後九時半過ぎ、綾瀬川が氾濫する可能性があるとの一報があり、避難所運営本部長がまず各教室の机と椅子を後ろ側に寄せ、準備

をして、体育館に寝ておられた皆さんに、二階三階の教室に移動して頂きました。

実は、区役所から派遣された方からは、体育館に既に集まり、毛布も配布されていた段階で、教室に移動させてくださいと言われておりましたが、皆さん落ち着いたところで、今更、移動したら文句が出るのではないかと思います。そのまま体育館に居てもらっていたのです。それで、寝ていたところに、移動の案内をして、移動してもらえらるうかと思いましたが、大きなトラブルもなく、スムーズに移動してもらいました。

移動が終り、どの教室も静かになったところで、運営役員さんも一時自宅に帰る方もおられました。

私は、本部長という立場もあり、十三日の午前中で避難解除になり、昼からの片付けが十三時ぐらいで終われば良いとの思いで、居残りしました。

午前〇時には、雨風もおさまり、空には満点の星と満月に近いお月様が見えました。私自身は、もう大丈夫と思っておりました。

避難して来られた方の中には、この時点で、三分の一ぐらいの方々が、徐々に自宅に帰って行かれました。

区からは、十三日午前四時半頃、東京湾が満潮を迎えるので、川の水面が上昇し、氾濫しかねないので、油断しないでくださいと言われていましたので、起きておこうと思いましたが、午後四時半を過ぎ、別に異変の連絡もなかったもので、更に大丈夫と思い込みました。

その時点から、案内したわけではありませんが、避難された方々も徐々に帰宅され、午前七

時には皆さん帰られました。

正午から片付けに来る予定だった役員さんもいたのですが、避難者がいなくなった時点で、片付けに入り、午前十時過ぎには、片付けも終わってしまいました。

区役所から派遣された方と学校の先生は、午前中、居残るということで、避難所運営の役員は解散しました。

今回、被害がなくて良かった。予定していたより早く切り上げられたので、私自身は、やれやれ、これで所沢には余裕を持って行けると思ったことでした。

しかし、先述の「たまたま」の言葉を聞いて、区からの時系列の対応表を見たとき、十二日午後九時半頃、綾瀬川が氾濫する可能性がある」と連絡があったのは、「避難指示」の発令であったこと。十三日の午前六時に「避難指示」が解除されたこと。午前十一時半に漸く「避難勧告」が解除されたのだと知りました。だから、本来は、夜中、明け方に帰宅する方には、危険であることをちゃんと案内しなければならなかったのだと。川の最高水位が十三日の午前九時半ごろで、最高波位が十三日の午前五時ごろであり、「たまたま」時間に差があったから、川が氾濫することがなかったのだと知らされ、何もなかった」で済ませていた自分の危機意識の低さを恥じることでありました。

「たまたま」という言葉は、「出会う」とか「合う」とか「都合（運？）が悪い」時に使いたがる私です。だから、被災したら、「たまたま」運が悪かった」と言ってしまうばかりなのかもしれません。地震が多発しております。死」も必ず訪れるのです。

医療と仏教の協働で

死と生を生ききった症例

田畑 正久氏
医療と仏教の協働「抜粋」

そこで臨床の現場で、現実を受けとめて生ききっていかれた患者さんの症例を、ご照会したいと思います。

私が大学を卒業した頃、昭和五十年前後のことです。岩手県の沢内村（現：和賀郡西和賀町）という、秋田県との県境の山間部の村での症例です。その沢内村は、保健師さんをはじめとした行政と医療が一緒になって地域のいのちを守ったということで、大きく評価をされて注目された地域であります。

その沢内村で診療していた増田進医師は、宗教とは関係ない先生ですが、沢内村の病院のいろいろな出来事の一つとして、次のようなことを書いています。

「あるとき、がんの患者さんが入院してきて、いろいろな訴えをするようになってきて、医師も看護師も手をこまねいてどうしようもなかった。そうしたら、ある老婆が、その枕元に来るようになって、「念仏しなさい」としきりと言うようになってきた。そうこうしているうちに、その患者さんは穏やかに亡くなっていかれました。」

「このようなことを、ある対談のなかで語っておられたのです。その本を読んだときは、「東北地方は、浄土真宗はあまりいいないから、あれは何宗だったかな」と思っていました。その後、いろいろと東西

の本願寺の関わりのなかで、その当時の沢内村の村長さんが太田祖電という大谷派の住職だということとがわかったのです。それで、「えっ、泡内村というのは真宗の関係の村か」と思いました。それから、増田進先生に直接連絡したかったのですが、なかなか思うようにできずにいたのです。あるとき、医療関係者のメディアに、最近の増田進先生の活動の記事が出たものですから、インターネットで調べまして、早速、手紙を書きました。

「先生、対談が出ていた雑誌は何だったのですか。それと、もう少し前後のことを、細かに教えていただけませんか」と尋ねたのです。そうしたところ、一週間ぐらいいして手紙が返ってきたのです。その手紙をちよとご紹介をします。ちよと前のほうは略します。

「あれは古い病院の頃でしたから、昭和四十年代の後半です。患者は、五十歳代の女性でした。隣接する秋田県の病院で横行結腸癌の手術を受け、沢内病院へ紹介され、自宅療養となったのでした。患者さんは、元気になるどころ張っていたのですが、ふとしたことで夫婦が口論になったとき、ご主人が『おまえは、がんでもう治らないんだ』と言ったことがきっかけで、彼女は地獄の思いに落ちたのでした。」

往診していた私は、「本当にがんか？今まで隠していたのか？治療はしているのか」と攻められました。私は、ありのままを話し、抗がん剤を使っていることなどを説明しましたが、納得したように見えても元気が失われました。

やがて、病状が悪化し入院しました。彼女は、「目を開ければ鬼が来る。目をつぶれば地獄が見える」等々を訴えられたものでした。そのとき、近くの病室にいたおばあさんが、彼女の枕

元に繁く通ってくるようになりました。そして、「死ぬのは怖くないよ。お念仏を称えなさい」と繰り返すのです。

そのうち、彼女は、おばあさんの言うとおりに、お念仏を称えるようになりました。やがて、彼女は落ち着き、表情も穏やかになってきました。笑顔も見られるようになって、私たちもホッとしたものでした。そして、安らかに永眠したのでした。

そのことを当時の村長に、「村長さんよりもすごい宗教者がおられましたよ」と話をした記憶があります。田舎で長く暮らしていると、個々の人々の生死に対する客観といいますか、素直さを感じ、私はよく「まちの人たちはかなわないね」と言ったものでした。本当に尊敬する村人がいたものです。

という内容の手紙でした。私も沢内村へ一度行ったことがあります。雪があるときに行って、途中、「これから先に人が住んでいるところがあるのかな」というようなところをずっと行って、盆地に行き着いたということがありました。そこに浄土真宗のお念仏がずっと続いているのだということを感じていただきました。このような事例で、宗教者が本当に信心というところまで伝えないと、その人は救われないのかという問題もあります。

本願寺派で、臨床宗教教師ではないですが、ビハーク研修を受けて活動されている、鹿児島島の長倉伯博先生という方がいらっしやいます。この先生にビハーク活動のなかでの患者さんとの交流を、あるお医者さんが記録していました。これをちよと紹介したいと思います。

ちよと私が医学生生の頃、同じ九州大学の仏教青年会の先輩で、小牧専一郎先生という放射線科

の医師の記録です。小牧先生は郷里の鹿児島に帰って、大きな市立病院の院長をされていましたが、鹿児島別院で聞法をされて、本願寺派のビハーク活動のことも知っておられ、仏教に対して非常に理解があった方です。もし機会があれば、ぜひ僧侶の方に病院に来てもらいたいと思います、そして終末期の患者さんの心の癒やしになればと願っておられました。そうしたら、たまたま小牧先生と長倉先生は、高校の先輩と後輩の間柄だったのです。

長倉先生は、西本願寺のビハーク研修を受けまして、二期生ということですから、二十年ぐらい前です。「ああ、仏教も素晴らしい活動をこれから始める」ことが出来ると思って、いくつかのキリスト教関係の病院を訪ねて研修を受けられました。その研修を終えて、「さあ、鹿児島で頑張るぞ」と決意を新たにしたのですが、鹿児島で主だった百箇所以上の病院へ手紙を出し「一緒にやりましょう」と言っ

て呼び掛けたのだそうです。そうしたら、全部断られたそうです。

それで、「どうしようかな」と思ったときに、小牧先生から電話がかかってきたのです。「ぜひ病院に来てほしい、会ってもらいたい患者さんがいる」と。長倉先生は、ちょうど、その週は予定が入っていて都合がつかないから、「来週でよろしいですか」と返事したら、「来週は死んでるかもしれない」と言われて、急遽、次の日に行ったのだそうです。

現在、小牧先生は肺がんで亡くなっておられます。それで私はそのときの自浄を知りたいと思って、小牧先生の奥さんに「何か資料がありませんか」と頼み込んだのです。それで探してもらって、奥さんから資料を送っていただきました。

それは「わたしのいちりづか」というものです。小牧先生は、アメリカにも行っておられた時期があ

り、アメリカに永住しようかと思っていた先生で、『Mistress of My Sin』(私の一里塚)というエッセイを書いておられます。それをちょっと詠んでみます。

これは、仏教がなかった、わからなかったというこ

とではなく、このようなかたちで患者さんも救われていくことがあるという症例だと考えます。

私自身は、かねがねターミナルケアに仏教を組み込まねばと思っていました。枕元に、お坊さんに来てもらうことを希望する患者さんがいたら、ぜひお願いしようと思っていました。そして、二人の方に巡り会いました。

その一人の齋藤さんという五十八歳の男性、後腹膜の肉腫に対して、三年前から三回の手術を当院で受けた方です。最後の手術では、いろいろな臓器に、がんがくっついており、完全に切ると出血する恐れがあり、ほとんど残しておなかを閉じました。

このことは彼に伝えなかったのですが、時間とともに増大し、いよいよ最後が近づきました。しかし、いかにおなかパンパンに張ろうと、痛くならうとも、愚痴一つ言わず耐えていました。私は、彼の見事な耐えぶりを驚嘆のまなざしで見ていました。でも、いよいよ一人では歩けないほど重症になった段階で、死を悟ったのでしょうか。悩みをしゃべり始めました。特に気になっていることと言えば、その昔、つまらない夫婦げんかで家を飛び出し、以後、妻子の生活の面倒を見なかったこと、実家にも出入りしがたくなり、実の母の葬式にも出なかったこと等でした。これを聞いて、初めて彼がじつと痛みを耐えていた理由がわかったような気がしました。つまり、自分を罰していたのです。

しかしながら、私はこの悩みを聞いてあげただ

けで、彼のこころの重しを取ることはならなかったようです。そこで私は、これこそビハークにお願いしようと思い、長倉先生にお願いすることにしました。先生は心やすく来てくださいました。彼の、その前後、患者さんのその前後の興奮状態は見物でした。

ここで、長倉先生が次の日に行ったのだそうです。そして、廊下を歩いていた医師が、院長と法衣を着けた長倉先生の二人が歩きながら話をしているのを見て、「院長、頭がおかしな人かな。何か、お坊さんなんかを呼んだぞ」と思ったというのです。それでそのエッセイは続けて、

その日は、朝からそわそわしていたのです。私が病室に行くと、一人歩きもできない状態なのに、「何を着ましようか。何をお礼にしたらよいでしょうか」と、聞く姿はまるで小学校の遠足前といったところでした。部屋は二人部屋です。で、その間だけ一人部屋に移しました。そして、いろいろと話をしたそうです。後妻の奥さんも一緒でした。

お坊さんが帰られた後の彼の晴れ晴れとした顔、これは一生忘れられません。そして、「よかった。よかった」と繰り返すのです。

後日、長倉先生に「どういってお話をしていたのですか」と尋ねたところ、要点としては、世の中には、この方よりも家族に惨いことをした人がおり、そういう人でも仏さまはちゃんと救ってくださるということ(これは『観無量寿経』の阿闍世のところでしょうね)。

二番目は、母への供養のお勤めをお寺でしてあげるといふ約束をしたこと。このようなお話をわれわれ医師にせよと言われても、それは逆立ちしてもできません(小牧先生は大変謙虚です

「俺たちは十分にやっているんだ」ではないのである。」

その道の方が、それらしくしゃべって初めてありがたくもなろうというものです。おかげさまで、この方は、長倉先生がまた来ると約束してくださいましたので、正直ホッとしました。

なお、死後、長倉先生と話してわかったことですが、一回目の訪問の折、「今、何がかりですか」との問い掛けに対し、彼は「後妻が神経痛を患っています、私がいなくなった後、苦勞するかと思うと不憫でなりません」と言ったそうです。

すると、それまで傍らで暗い顔をして話を聞いていた後妻の奥さんの顔がバツと輝いたそうです。後妻という立場にしてみれば、これ以上の愛の告白はないと思います。結局、この方に対するビハラの役割としては、本人に安らぎを与えたのみか、残された人にも愛を残したと言えましょう。とても医師の私にできることではありません。

このように、小牧先生が文章に残しておられました。この患者さんが、本当に自分の困っていることに對して、浄土教でいうならば、「無条件の救い」のころを伝えていただいたのでしょうか。この人なりの安心のころが起っているのではないかということを思わせていただきました。

もう一つ紹介して終わらせていただきます。

『うらやましい死に方』（文春文庫）という本です。作家の五木寛之氏が「うらやましい死に方」というテーマで一般の方に体験を募集しました。それを編集して本にしたのが、今から十五年ぐらい前です。さらにその第二冊目が出ています。一冊目の

『うらやましい死に方』の最初に出ていた金沢の高田俊彦さん（タイトル：今夜は浄土にまいらせてもらおうよ）という方が、また二年後に、その第二冊目にもう一回書かれているのです。これはちよつと目を通していなかったもので、読んでみて、これはすごいと思ってご紹介させていただきます。

最初の一冊目は、昭和二十八年（一九五三）に、高田さんのおばあちゃんが亡くなったところでの話を書いておりました。二冊目は、自分のお母さんが平成八年（一九九六）に亡くなったときのことを書いています。これも、本当に浄土真宗の土徳のあるところでは、「このようなことが起こるのだな」ということを思わせていただきます。

平成八年三月十六日、母やよがりウマチによる多臓器不全のために亡くなった。享年八十一歳。モルヒネも輸血もそろそろ限界と言われていた病院から、危篤を知らせる電話が入ったので、十四日のお昼、急いで駆け付けると、やよ（母）は次のように言った。

「また来たか、もう来るなど言うて置いたがに。おらの年取った妹たちも来たし、お前ら子供も、また来てくれた。（中略）生きている者の方が、おらよりも大変やなあ」「前から話して置いたとおり、臨終やからと騒ぐことはないぞ。平生業成やぞ。お文さまにあるやろ。おらは、もうお念仏のお陰で正定聚や。だからして、臨終に良いも悪いもない。ひとの臨終をとやかく言うもんでないぞ。おらの臨終は阿弥陀さまにまかせたがや。さあ早よう家へ帰って休んでくれ、運転には気をつけてな。」はハは「言うい終えると念仏を唱えながら、目を閉じた。

睡眠というよりは熟睡に見えた。しばらくして、また目を覚まして、母は「俊、おまえ、まだ

おったが。あ、この前、会いたい者がおったら呼ぼうかと言ってくれたが、それはいらぬぞ。会う縁にある者にはもう会えた。俱会一処と言うぞ。会う縁にある者にはまた会える。ほんとうに誰も呼ばんでくれ。（略）

これは大事なことや、お念仏や。お念仏は人それぞれがいただくもの、無理せんていい。おまえも縁をいただいているのやからな。お念仏がひとりで湧いてきて、それに押されて、親さまの懐にとぼしこお（金沢弁：突き進む）。そんなところになるものや。おら、そうして阿弥陀さまにすっかり任せてしもうたがや。」

このような対話です。臨床の現場では、病気で亡くなっていく場合と、このように老衰に近いかたちで亡くなっていく場合といろいろあるわけです。そのような医療の現場で、まさに老病死の現場に宗教的な関わりの文化がほとんどない状態のなかで、日本の医療現場が動いているところがあります。その現状において、ぜひとも医療と仏教が一緒になって患者さんに関わっていく取り組み、そういう文化状況に、社会状況になっていただけたらいいなという思いを持っています。私自身も龍谷大学で仕事をさせていだいて、そういう取り組みに関わっていきたいと思っております。

今日は、「医療と仏教の協働」の取り組みというかたちで、日頃、私に関わり、関心を持っていることを雑駁なお話で申し訳ありませんが、そういうことで発表を終らせていただきます。

『ビハラと妙好人』

ビハラ医療団講義録パートⅧ



稱讃寺 行事予定

二〇一九年十二月の行事予定



一日 日曜礼拝 休座

六日 金 のんのん法話会 午後一時

八日 日曜礼拝 午前九時

五日 宗祖親鸞聖人報恩講 正午

六日 月 のんのん法話会 午後一時

二三日 日曜礼拝 午前九時

二六日 木 のんのん法話会 午後二時

二九日 日曜礼拝 午前九時

普通の日々も

ふつう ひび

わたし たいせつ あしあと

私の大切な足跡

二〇一九年 心のともしび 十二月カレンダーより

二〇二〇年 一月の行事予定

一日 水 元旦会

五日 日曜礼拝 午前九時

六日 月 のんのん法話会 午後二時

九日 木 〓 一〇日 金

本山・御正忌報恩講出勤

二日 日曜礼拝 午前九時

四日 水 〓 五日 水

本山・御正忌報恩講出勤

六日 木 のんのん法話会 午後二時

九日 日曜礼拝 午前九時

二六日 日曜礼拝 午前九時

のんのん法話会 午後二時

二〇二〇年 二月の行事予定

二日 日曜礼拝 午前九時

六日 木 のんのん法話会 午後二時

九日 日曜礼拝 午前九時

六日 月 のんのん法話会 午後二時

二三日 日曜礼拝 午前九時

二六日 木 のんのん法話会 午後二時

二〇一九年 十二月 法務・布教・出向予定

一日 日浦家七回忌 十一時

小林家一周忌 十五時

三日 坂根家月忌参り 九時半

六日 金 のんのん法話会 十四時

七日 光明寺法助 十時

上谷地家十三回忌 十四時

八日 善寺法助 十時

宇恵野家一周忌 十四時

二日 〓 二日 木

栃木南組妙傳寺報恩講出勤

四日 善寺法助 十時

田川家一周忌 十二時

五日 稱讃寺報恩講 正午

六日 月 のんのん法話会 十四時

七日 嶋田家一周忌 十二時

二三日 奥田家法事 十時

了善寺法助 十四時

二六日 木 のんのん法話会 十四時